

## 野球肘

札幌医科大学医師会  
札幌医科大学 心臓血管外科

### 川原田修義

メジャーリーグ、エンゼルスの大谷翔平選手が右肘の回復具合についてコメントしている記事を読みました。彼の右肘は日常生活では何の問題もなく、普通の感覚に戻っているとのことでした。私は1人の野球ファンとして、大谷翔平選手の復活を心待ちにしております。大谷翔平選手は一生に一度、会えるかどうかの逸材だと思いますし、ぜひ去年のMLBシーズン開幕時のようなパーフェクトな状態に戻ってもらいたいと願っています。しかし、今シーズンは投手として活躍できず、バッターに専念すると報道されており、彼のピッチングを見ることはできないのが残念ですが、逆にバッターに専念した時の活躍はどれほどなのかと期待が膨らみます。

昨年のシーズン終了後に、驚くほど早い決断で、右肘靭帯再建手術（トミー・ジョン手術）を受けておりました。私は見識が狭かったので、トミー・ジョン手術は、最初にこの手術を行なったドクターの名前かと思っておりましたが、初めてこの手術を受けた投手の名前だったことが分かり驚きました。この手術を1974年に考案したのがフランク・ジョーブ先生で、トミー・ジョン投手がこの手術を受けた頃の手術成功率が1%未満だったそうですので、そう考えるとトミー・ジョン投手はよくこの手術を受け入れたなあと感心するばかりです。1974年から2015年3月までにトミー・ジョン手術を受けたプロ選手数は、メジャーやマイナー、複数回を含め900人以上いるそうです。また1986年から2012年までにトミー・ジョン手術を受けたメジャーリーグベースボール傘下の投手を調査したところ、83%がメジャーに復帰し、マイナーも含めると97%が実戦復帰を果たしたそうで、トミー・ジョン投手が受けた時に比べて格段の成功率の向上です。この成功率の向上は、手術そのものの技術的進歩があったからではなく、リハビリテーションの知識と方法の著しい進歩と改善によるものだとされており、これにも驚かされます。

リハビリテーションについては昔とずいぶん変わったようです。ヤンキースのエース田中将大投手も2014年に7年総額1億5500万ドル（約176億8000万円）の大型契約を結んでヤンキース加入しましたが、この年の圧倒的ピッチングをしていた7月に右肘靭帯部分断裂を発症しました。トミー・ジョン手術を受ける可能性も浮上する中、結局2ヵ月半の保存療法で復帰しております。昔の日本野球であれば、根性論で投げ続けていて、結局右肘はダメになったと

想像します。

先日、新潟県高野連は去年12月、ピッチャーのケガの予防のため、今年の春の県大会で、1試合の投球数を1人当たり100球に制限する球数制限を導入すると全国で初めて発表しました。しかし、大会が全国共通の「高校野球特別規則」のもとで行われていて、球数制限を導入する場合は規則の改正が必要なため、高野連の理事会で審議されましたが、結論はまだ出ておりません。部員が少ない高校に配慮しているとのことですが、個人的には100球の球数制限には賛成です。まさか高校生がトミー・ジョン手術を受けることになってはシャレにもなりません。

大学時代野球をやっていたとき、球を投げるたびに、右肘内側に痛みが生じていたのを覚えております。野球肘は、肘内側副靭帯損傷という名前が付いております。私は整形外科医ではないので詳細は分かりませんが、シーズンが終わって、球を投げなくなると回復していました。なんとなく投球を禁止する保存的治療を実際に行なっていたわけです。

現在、私は札幌医科大学準硬式野球部監督を引き受けておりますが（実際には仕事の都合上、試合に参加できる時間はないのですが）、ケガだけはしないように学生に話をしております。野球肘であれば、さほど医療行為を行うにあたり重要ではありませんが、他の重症なケガは絶対に避けたいところです。これからの日本の医療に貢献する人材がケガで希望する進路に進めなくなることは、非常に悲しいことです。特に医師数が減少している外科、中でも心臓血管外科は、専門医制度の中でも専門医取得が最も困難ですし、専門医更新も大変です。心臓血管外科専門医試験を受験する医師の平均年齢が40歳というのが、その困難さを示しているのかもしれませんが。しかし我々の診療科では、十分なトレーニングができる環境を整えており、卒後8年～10年で専門医を取得できます。でも若い医師の参入が少ないのは、まだまだ宣伝不足？なのでしょうか。日本の場合は欧米諸国とは違って、仕事が肉体的に大変な診療科も、そうでない診療科も給料にはさほど違いがないことが外科や産婦人科離れの原因であると主張する先生もおります。外科にインセンティブをつけるべきと主張する医師と厚生労働省の官僚との考え方の違いもあって、なかなか現実には話は進みそうもありません。一気に改革するために、故障した肘の手術のトミー・ジョン手術を行っても、その後のリハビリテーションがうまく行わないと外科医の処遇は改善しないでしょうし、もちろん保存的治療のみでは故障した肘は良くならないでしょう。

さて今年は、札幌医科大学準硬式野球部の成績はどうなるのか、監督ですので、今年こそは試合に参加したいところです。できれば試合中にサインでも出したいなあ(笑)。